

県指定史跡

安久津古墳群

安久津第3・4号墳発掘調査報告書

1992

山形県教育委員会

県指定史跡

安久津古墳群

安久津第3・4号墳発掘調査報告書

平成4年3月

山形県教育委員会

序

本書は、平成3年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した県指定史跡安久津古墳群の調査成果をまとめたものです。

安久津古墳群は、山形県の南東部に位置する高畠町にあります。高畠町は周囲を吾妻、飯豊、蔵王の山々が連なり、最上川により形成された肥沃な大地が広がっています。その周辺には国指定史跡の福荷森古墳や日向洞窟をはじめとする全国でも希な洞穴遺跡があります。また県指定や町指定史跡や建築物などの文化財も豊富にあり、これらは町民の暮らしや風土に融けこんで、「まほろばの里」として広く知られています。

調査では、安久津支群5基の古墳のうち2基の古墳を調査しました。とくに4号墳の周溝は全周することが明らかになり、南東側の周溝からは多量の須恵器の壊や壺あるいは甕などが発見されました。このように町内で余り明らかになっていない古墳の形態や規模などが知ることが出来たことは、8世紀前半から9世紀前半の置賜地方の古墳研究の手懸りとなったものと言えます。

埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶこととともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申しあげます。

平成4年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

1 本書は、山形県教育委員会が平成3年度に実施した「風土記の丘」歴史公園事業の歴史資料館建設工事に伴う安久津古墳群の安久津支群の緊急発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、平成3年4月15日から5月23日まで、延25日間に亘って行った。

3 遺跡の所在地は山形県東置賜郡高畠町大字安久津字味噌根2222外に所在する。

4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会（教育庁文化課）

調査担当 山形県埋蔵文化財緊調査団

　　事務局長補佐 佐々木洋治

　　調査班長 佐藤 正俊

　　主任調査員 伊藤 邦弘

事務局事務局長 土門 紹穂

　　事務局長補佐 田苗健太郎

庶務班長 野尻 侃

主任事務員 新闇 紘子・賣間 秀男・永井 健郎・渋江 正義

5 発掘調査にあたっては、山形県土木部建築課・高畠町企画課・高畠町教育委員会文化課・高畠町郷土資料館・山形県東南置賜教育事務所などの関係機関の協力を得た。

6 本書の作成・執筆は佐藤正俊が担当した。編集は佐藤正俊・安部 実が担当し、全体の総括を佐々木洋治が行った。

7 調査記録および出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

8 本書の凡例は次のとおりである。

(1) 本書で使用した遺構遺物の記号は以下のとおりである。

S D：溝跡・溝状遺構 S K：土坑 R P：土器群 R Q：石製品 S：礫

(2) 挿図の方位は磁北を示し、グリッドの南北Y軸方向はN-3.8°-Wを計る。

(3) 遺構の挿図縮尺は $\frac{1}{100}$ ・ $\frac{1}{200}$ で探録し、各々にスケールを付した。水糸のレベル高は、第4図で BM=234.20m、第5図では BM=234.70m である。また、層序区分の記号は、ローマ数字「I～V」は遺跡の基本層序で、算用数字「1～5」等は遺構内の覆土の区分を表している。

(4) 土器実測図・拓図の断面は、白ヌキが土師器、黒ベタは須恵器を表わす。また土師器では内黒のものは内面に網点を入れ、各々スケールを付した。

(5) 遺物観察表中の()内の数値は、図上復元による推計値あるいは残存値を示す。

(6) 本書中の遺物番号は、実測図・観察表・図版とも共通のものとした。

(7) 遺物図版は、原則的に壺・高台壺類 $\frac{1}{10}$ 、壺・甕類等を $\frac{1}{20}$ に表わした。

9 現地調査・報告書作成では、次の方々から種々のご指導と助言を賜った。記して感謝申しあげる。手塚 孝 月山隆弘 井田秀和（順不同・敬称略）

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概観	
1 遺跡の概要	7
2 検出遺構	7
3 出土遺物	13
IV 調査のまとめ	22
〈参考文献〉	

挿 図

第1図 安久津古墳群位置図	3	第6図 土器実測図 (1)	15
第2図 安久津古墳群分布図	5	第7図 土器実測図 (2)	17
第3図 安久津支群概要図	9	第8図 土器実測図 (3)	18
第4図 4号墳周溝跡平・断面図	11	第9図 土器実測図 (4)	19
第5図 1・2・3号溝跡土層断面図	12	第10図 土器実測図 (5)	20

表

表-1 周辺遺跡一覧表	2	表-2 土器観察表	21
-------------	---	-----------	----

図 版

図版1 調査区近景 (E↑) 4号墳調査風景 (SW↑)	
図版2 1号墳近景 (S↑) 2号墳近景 (S↑)	
図版3 3号墳近景 (E↑) 3号墳土層断面 (S↑)	
図版4 4号墳全景 (S↑) 4号墳 (1TR) 土層断面 (NW↑)	
図版5 4号墳東側周溝全景 (SW↑) 4号墳周溝土層断面 (SW↑)	
図版6 4号墳東側周溝確認 (N↑) 周溝内土器出土 (N↑) 周溝南側土器出土 (E↑) 周溝内土器出土 (S↑) 3号溝跡全景 (NE↑) 3号溝跡出土 (SE↑)	
3号溝跡土層断面 (S↑) 4号土坑全景 (SW↑)	
図版7 土器(1) 土師壺・盤 須恵器蓋・高台壺・壺・甕	
図版8 土器(2) 須恵器壺・甕	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

高畠町には国指定史跡の日向・一ノ沢・大立洞窟をはじめとする国・県指定史跡が安久津八幡神社を中心に、県南県立自然公園区域内に数多く存在する。中でも安久津古墳群は早くから多くの研究者に注目され、羽山支群出土の勾玉類や多量の人骨は学史的にも高く評価されている。昭和12年、早稲田大学西村真二氏の置賜地方の古墳調査に初まり、昭和25年には山形大学柏倉亮吉氏が羽山・安久津・清水前古墳などを、昭和33年に東京大学鈴木尚・山内清男の両氏による人骨の調査や周辺遺跡の調査がなされた。その後も県教委員会が主体となり昭和48年・59年にも調査が進められ、古墳群の性格、形態、規模などが明らかにされた。さらに昭和59年には西方から個別に呼称された北目・羽山・源福寺・加茂山洞窟・安久津・味噌根・鳥居町の各古墳群一帯を県指定史跡の安久津古墳群として指定し、各古墳群を支群と称した。

このような調査結果や国・県指定史跡が多く存在する地域一帯は、県民の郷里となるような代表的な史跡や文化財を中心に、その広域的な保存と活用が考えられた。昭和52年度に「第6次山形県総合開発計画」等の中で、風土記の丘（歴史公園）建築構想が示され、平成2年度から具体的になり、平成4年度に資料館の開館に向けて準備を進めている。

資料館の建設予定地には、安久津支群の4基の古墳が存在することから、県文化課・県建築課・高畠町文化課と協議を進めた。平成3年3月に分布試掘調査を実施して、その結果に基づいて、建設用地の造成工事に先立って、3・4号古墳は現状の状態からみて緊急発掘調査を県教育委員会で、1・2号古墳は復元保存と活用の計画から確認調査を高畠町教育委員会でそれぞれ担当し、平成3年4月15日から5月23日まで分担し、合同で発掘調査にあたることにした。

2 調査の方法と経過

調査期間は発掘調査・整理・事務処理等を含めて、平成3年4月1日から平成4年3月31日まで、現地調査は平成3年4月15日から5月23日までの25日間に亘って実施した。その後室内において遺物整理や報告書作成業務を行った。なお、現地説明会は5月22日（水）関係機関の協力のもと約70名の参加者を得て実施された。

調査は、資料館建設用地内に限定し、分布試掘調査の結果に基づいて行った。グリッドは建設予定地南西端に基点を設け20-40Gとし、東西方向をX軸、南北方向をY軸となる座標を決め、2m×2mを一単位とするグリッドを設定し、X軸・Y軸とも算用数字で呼称し、Y軸方向がN-3.8°-Wを計り、幅1.5m・長さ10~20mのトレンチを併用し、遺跡の概況を把握し、古墳が位置する地区は角度45°の方射状あるいは十字状のトレンチを設定し範囲を明らかにした。（第3図）

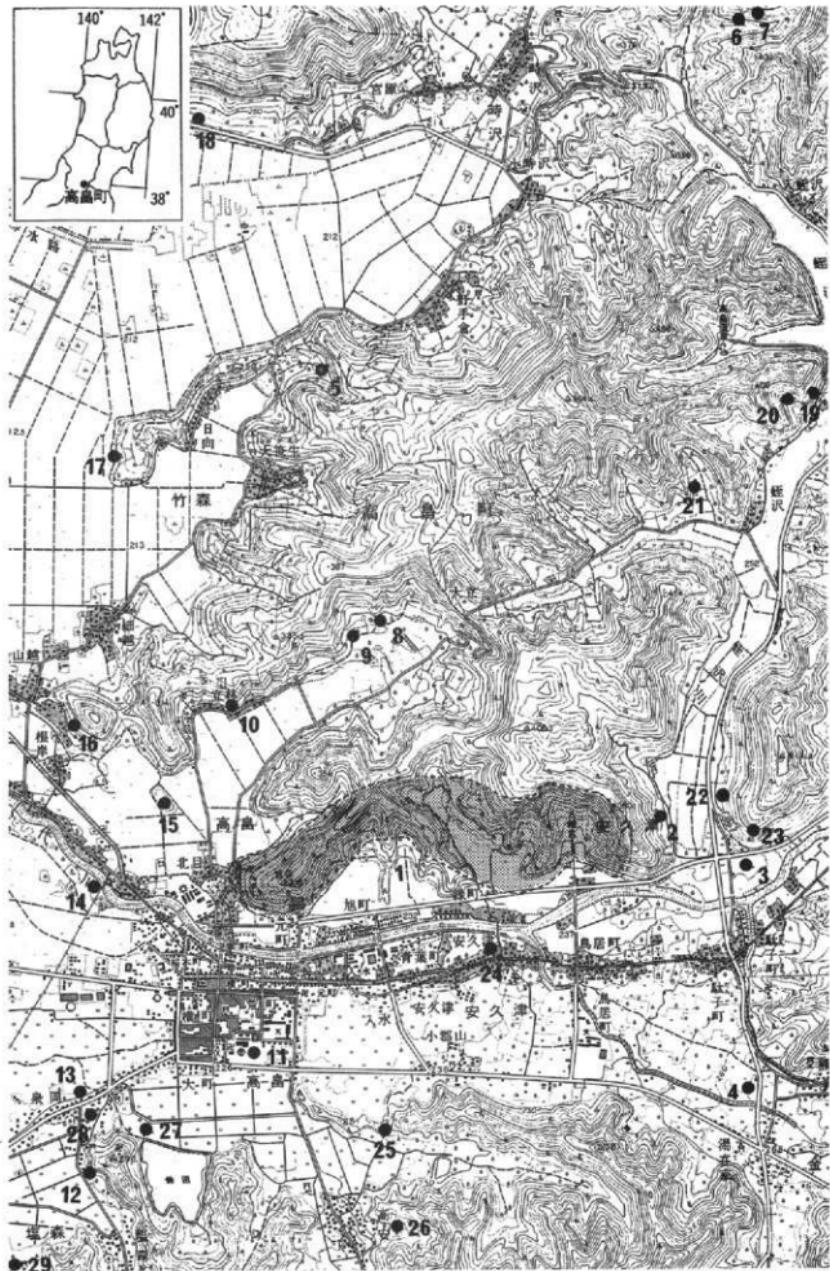
発掘調査面積は、拡張区を含めて約1,744m²である。

調査の経過は、作業の進行状況からみて四段階に分けられ、概括すると次のとおりである。

- 第1段階 4月15日～19日（5日間） 調査器材等の搬入。10mを単位とする基準杭を設け、調査区を設定。幅1.5m・長さ10～20mのトレンチ粗掘作業を西側から東側へ開始。各トレンチの土層断面の記録。重機械使用による拡張区の設定と準備。
- 第2段階 4月22日～5月7日（8日間） 重機械による表土剥・掘削。掘削終了地区より面整理作業実施。4号墳東側地区をさらに25～30cm掘り下げ地山面を検出し古墳以外の遺構有無を確認。遺構無。さらに3・4号墳の範囲や周溝の確認。3号墳では明確に出来ず範囲のみ。4号墳西側半分の周溝を確認。
- 第3段階 5月8日～15日（6日間） 4号墳の主体部等の確認のため十字状・放射状のトレンチ掘、東側周溝検出のため20～30cm掘り下げ拡張、周溝検出。3号墳十文字にトレンチ掘、断面等の記録、周溝不明確で調査完了。諸記録作業。
- 第4段階 5月16日～23日（6日間） 4号墳東側と南西側周溝の精査検出。その際SD3を確認し検出。東側周溝内より多量の一括土器が出土、検出及び記録。SD2の土層記録。22日調査説明会（参加者約70名）。全体の記録や写真撮影。器材の撤収準備、搬出。23日に現場作業を終了。

表-1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
①	安久津古墳群	古 墳	16	根岸山	縄 文
2	山の神古墳群	古 墳	17	羽口	縄文・平安
③	清水前古墳群	古 墳	18	松沢	縄 文
4	金原古墳	古 墳	19	坂岩岩陰	縄 文
⑤	日向洞窟	縄文～古墳	20	乞倉岩洞穴	縄 文
6	一ノ沢岩陰	縄文～平安	21	西沢	縄 文
⑦	一ノ沢洞窟	縄文～平安	22	ムジナ岩洞穴	縄 文
⑧	大立洞窟	縄文～平安	23	鳥取山洞穴	縄 文
9	大立岩陰	縄 文	24	大久保	縄文・平安
10	大立古墳	古 墳	25	首戸	平 安
11	高畠城跡	平安・室町～江戸	26	高安窯跡	平 安
12	石堂山古墳	古 墳	27	日照	奈良～平安
13	泉岡蛭夷塚	奈良～平安	28	明神崎	縄文・平安
14	石ヶ森	縄文・古墳	29	芦垣	奈良～平安
15	巻数山	平 安	○：県指定史跡		
			□：国指定史跡		



第1図 安久津古墳群位置図 (S = 1 : 25,000)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境（第1図）

高畠町は、山形県の南部、米沢盆地の東端にある。東に奥羽山脈を境界とし、宮城・福島の両県に隣接し、北と南は丘陵地帯で上山・南陽・米沢市に接し、西は北流する最上川に限られ、平地では肥沃な水田地帯が展開している。町内を貫流する屋代川、和田川、松川などの主な河川はそれぞれ西進、北上し最上川に注ぎ上流部を形成している。安久津古墳群は高畠町の中心街付近の東西に延びる丘陵地帯の南麓斜面等にあり、標高が230mから280mに偏在し、西から北目・羽山・源福寺・加茂山洞窟・安久津・味噌根・鳥居町の各支群からなり、現在まで52基の古墳が確認されている。

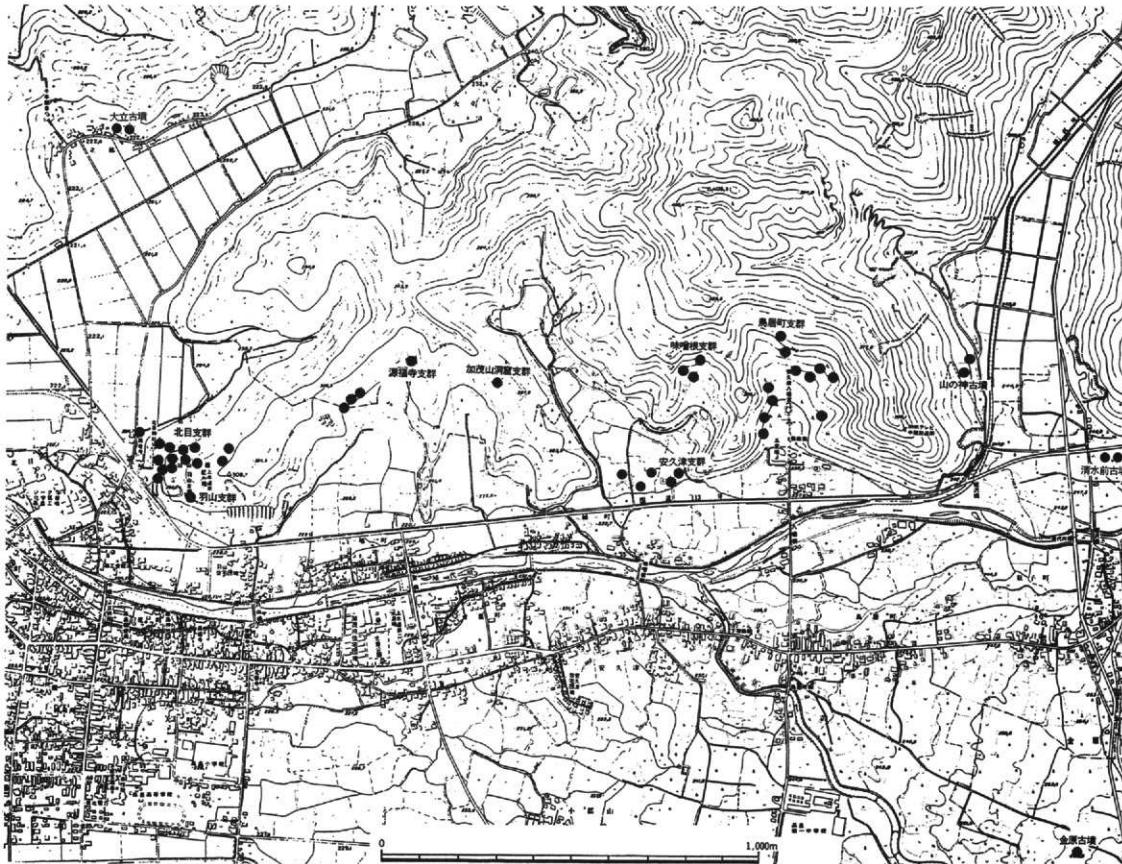
安久津支群は、宮城・新潟両県を結ぶ国道113号線沿いの北側、屋代川の右岸自然堤防上に立地、周辺の水田や畑地よりも一段と高い微高地に位置し、その北側は後背湿地の様相となっており、北緯38°01'・東経140°11'、標高約235～240m前後を計る。地目は水田・畑地・荒地・墓地となっている。遺跡からは、肥沃な田園風景とともに東に隣接する鎌倉時代創建の安久津八幡神社や遠くには日本三文殊の一つ亀岡文殊堂の修驗山が眺望でき、自然と文化財が融けこみ「まほろばの里」を色濃くのこしている。

町の東、背梁山脈と呼ばれる奥羽山脈から西に延びる山腹や丘陵地帯は、新第三紀初期ごろ噴出した火山岩や凝灰岩などの地層である。凝灰岩が露出する山腹の南面標高300m前後には、縄文時代草創期の日向・一ノ沢・大立の洞窟や岩陰遺跡が群している。さらに屋代川を隔てて丘陵南端部の斜面には、7～8世紀代の山寄せ技法で構築された円墳を主体とする安久津古墳群・山の神・清水前古墳群が密集している。町の中央は、屋代川や和田川によって開析された小丘状が形成され、その自然堤防上には縄文時代の後期・晩期や奈良・平安時代から中世にかけ、奥羽山脈沿いの遺跡群と比較して新しい時代の遺跡が遍在している。

2 歴史的環境（第2図）

町の北東、奥羽山脈の山腹や丘陵地帯は、基盤である凝灰岩の露頭が随所にみられ、その風化により形成された洞窟や岩陰も多く、また古墳の主体部となる玄室と羨道が明確に分けられる横穴式石室の石材としも用られている。

古墳の本格的調査は、昭和25年の山形大学柏倉亮吉氏によって始められ、置賜地方を中心として古墳の形式や造築法等の成果が収録され、特に県内全般に亘る地域別の特徴を公表したことは古墳研究の大きな前進となった。その後町内の調査は、昭和48年の清水前古墳群、昭和59年に安久津古墳群（第1次）、昭和62年の山の神古墳の緊急・学術調査がなされており、造築法は山寄せ技法によるものが大半で、年代も8世紀前半から9世紀前半に比定される。しかし、安久津古墳群をはじめとして古墳の遺存状態も悪く、その大半が破壊されているため、各古墳の全体像を解明するには至っていない現状である。



第2図 安久津古墳群分布図

III 遺跡の概観

1 遺跡の概要

安久津支群は、墨代川右岸の自然堤防上に位置し、南には墨代川の旧氾濫原が屈曲するように接し、北は一帯がやや落窪む掘鉢状を示し後背湿地の様相となり、古墳が在る微高地は東西に蛇行するように長く延びている。北東の支谷奥くの山腹に味噌根支群が偏在し、標高差70m前後を測る。(第2図)

各古墳は、東から1号墳で調査区外西を5号墳として次順呼称し、ほぼ円墳の形態を示している。古墳の現況は、3～5号墳は水田の開田や耕作により上部構造である石室・封土等は削平されてその現状を留めておらず、旧字切り図や分布試掘調査によって位置を確認した。1・2号墳は、石室上部の封土は削平されているものの現状の高さも2.1～2.5mと封土が残存し、石室の位置も確認できる。なお1号墳は昭和25年に調査が実施され規模・内容・出土遺物等が明らかにされている。各古墳の分布・位置関係は、南に2・3号墳の径26m前後の大型、北には1～3号墳で径10m前後的小円墳が位置し、5号墳を基点に1号墳まで“W”字形を示し、各古墳の中心部からは約35～40mの等距離にあり、さらに1・3号墳および2・4号墳の間隔は約70mを計り、各古墳の位置関係は規則的に造営されている。(第3図)

層序は、全体に水田開田時により上部は削平を受けているが、下部の地山層は安定し4号付近で高く、南と北へ大きく傾斜している。5層に区分され、I層黒褐色土(耕作土15～32cm)、II層黒褐色シルト(小礫を多量に含む・旧表土古墳時代以降・8～12cm)、III層暗褐色シルト(砂混り・縄文時代造構包含層・18～23cm)、IV層黄褐色シルト(細砂質・地山・32～43cm)、V層灰黄褐色粘土(基盤層)である。

遺物は、大部分が4号墳東側溝跡と3号溝跡より須恵器の壺や壺などが一括に投棄されて検出されている外は、II層中より若干出土している。縄文時代の遺物は、III層中より前期の大木5式の土器片6点、縦長石匙1点、石器剝片が検出する。その外II層上部より広範に近世末から明治期の陶磁器が出土しているが、これらの時代の遺構は検出されなかつた。

2 検出遺構

3号墳(第3図 図版3)

調査区の中央西寄り、緩傾斜地の38～42～42～46グリッド内にあり、標高234.55m前後に位置している。南側に在る4号墳とは約35m、東側に位置する2号墳とは約45mの距離をもつ。確認面はII層上面で、遺存状態は上部構造が削平されて存在せず、北側はさらに40～50cm削平され、表土を剥ぎ取るとV層に達する。

形状は、確認された状況から推測し円墳とみられ、古墳基底部の盛土が部分的に径20～50cm、深さ3～5cmで黑色土と灰黄褐色粘土がブロック状に残り、土層の観察からその範囲は東西25m・南北8.5mの規模である。主体部の掘り込み等の施設は検出されない。

周溝は、十字にトレンチを設定し検出に努めたが確認できなかった。出土遺物は、須恵器の甕や壺の破片が、推定される範囲から僅か出土したのみである。その外構造は不明であり、旧字切り図や外の古墳の位置関係で古墳跡と特定したものである。

4号墳（第3～5図 図版4～6）

調査の西側の微高地、22-35-24-37グリッドに在り、標高234.70m前後に位置している。北西側でSD2（旧河川跡）と接し、東側でSD3と重複し、東へ約70mの距離で2号墳が位置し並列する。遺存状態は、上部構造が水田耕作により削平され原形を留めておらず、周溝を確認し検出したものである。

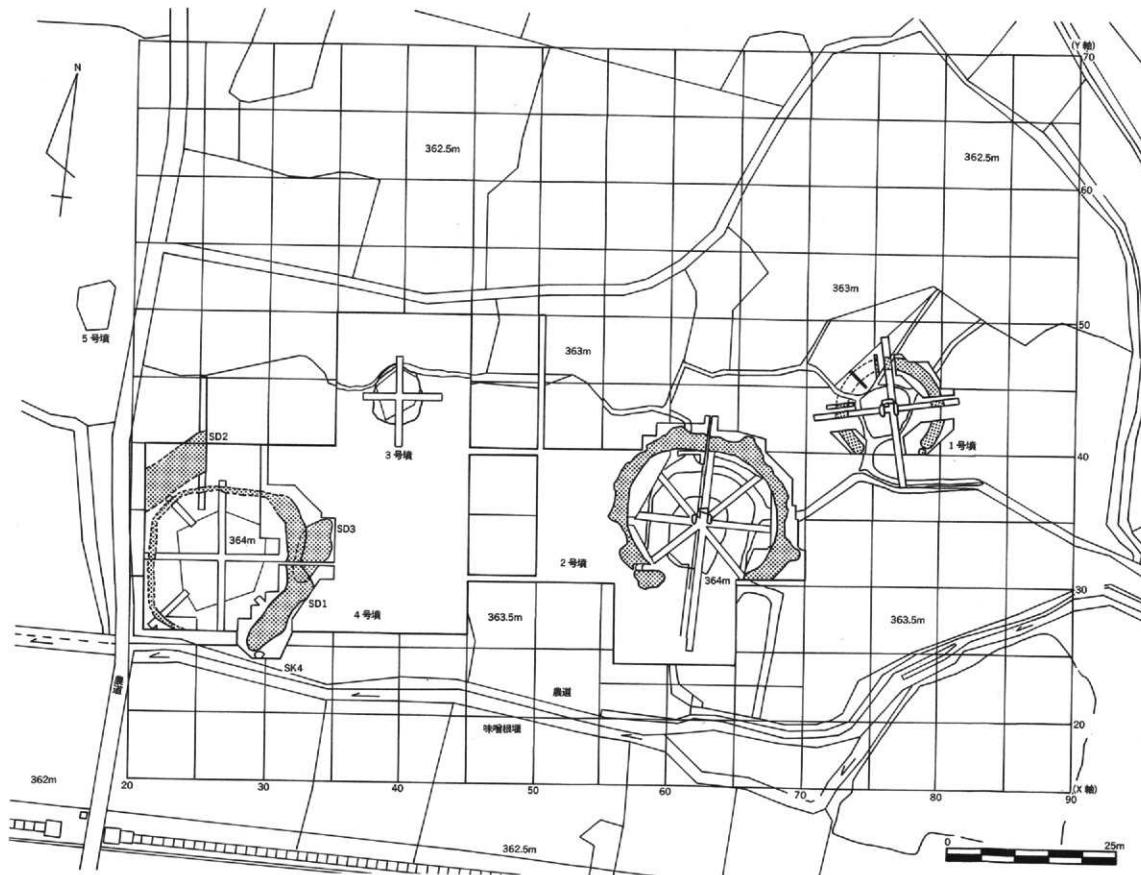
形状は、周溝の状態から推定し円墳と考えられる。封土は、古墳の基底部が8～16cm残存し特に古墳中央から南域で顕著にみられる。層位は、黒褐色土で凝灰岩の風化粒や灰黄褐色粘土や褐色粘土がブロック状に混り、所々に凝灰岩礫が築き固められている。北側では水田耕作によりさらに削平されているため確認できず、わずか周溝部の周辺に残っているだけである。主体部などの掘り込みは検出されない。規模は、東西方向約24.5m・南北方向約23.25mを計る。

周溝（SD1）は、南側を除く外は多角形状や張り出しを持って全周する。溝の検出状況は、北側から南西側にかけて上幅91～101cm、掘り込みが僅か4～7cmと浅く、溝底を検出し、覆土も黒褐色シルトで風化礫粒や粘土ブロックが混る程度で判別しにくい状態であり、形状もやや不整を示す多角形状となる。また南西側のトレンチ拡張区の溝底より須恵器壺形土器（第6図10）が投棄され散在した状態で出土する。南側は、1・2号墳でも確認されているが、幅1.5m前後の範囲でブリッジ状になり開口部を形成している。

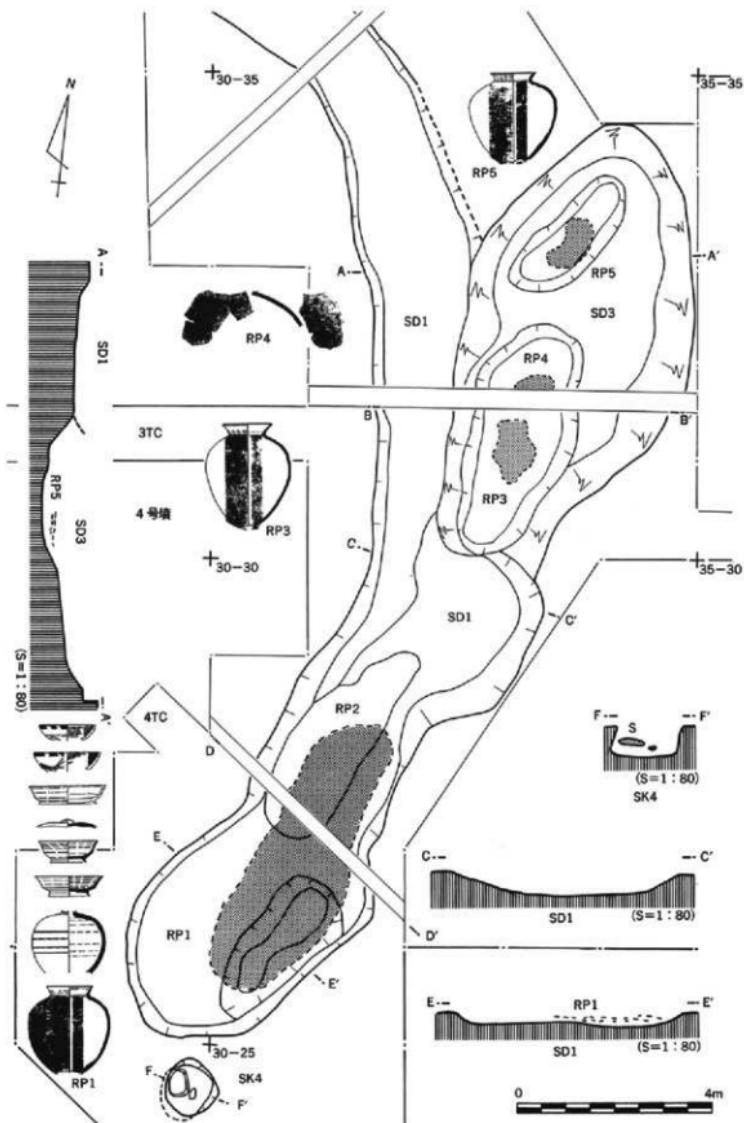
東側の周溝は、II層下部をさらに20～25cm掘り下げ検出した。北側で上幅1.85～2.05m・溝底幅1.42～1.83m・深さ31～43cmである。中央部は東に張り出しを有し、上幅約3.62m・溝底幅2.42～2.51m・深さ58～63cmで、西側で緩やかに東側で直立するよう掘り込んでいる。南側はさらに幅が拡がり、上幅3.54～3.78m・溝底幅3.05～3.26m・深さ31～64cmである。覆土の堆積状態は、全体に西側からの封土などが流入しレンズ状に堆積し、1～3層は緩やかに時間差が長く、中層以下4～7層は遺物（土器が主体）が西側から急激に崩落するように認められ時間の差が余りなく堆積する。中層の4～6層にかけては凝灰岩の小礫や風化礫粒、灰黄褐色粘土の小ブロックが多量に混り、西側からの封土などの流入が顕著にみられる。遺物の出土は、溝跡の南側に密集し、須恵器の大形甕や壺を主体に一括や完成品が多量に出土し、いずれもが西側から流れ込むよう検出される。恐らく西側墳丘の裾付近にあったものが崩れ落ちたとみられる。

4号土坑（第4図 図版6）〈SK4〉

30-25グリッド内、北側で4号墳東側周溝と接する。平面形は円形を呈し、西側断面が袋状になる。規模は径116cm・深さ58cmである。覆土は黒褐色シルトに黑色土や灰黄褐色



第3図 安久津支群概要図



第4図 4号墳周溝平・断面図

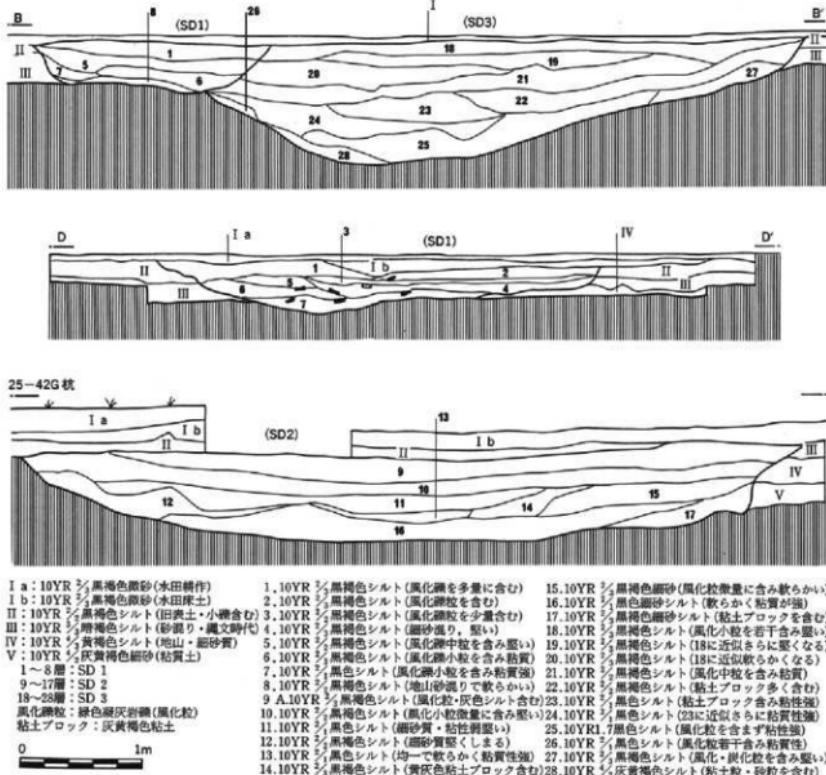
土が混る一層であり、4号墳下層と近似する。1号墳からも同様な位置関係で土坑が検出されている。遺物は出土しない。

2・3号溝跡（第3・4図 図版6）〈SD2・4〉

2号溝跡は、4号墳の北西に接する。幅6.48m・深さ5.03mで、恐らく東西方向に蛇行し延びている。掘り込みは緩やかで底面は凹凸が顕著である。遺物は中層から8世紀代の須恵器の壺破片7点出土する。覆土の状態から旧小河川と推定される。

3号溝跡は、4号墳周溝東側で重複する。形状は不整梢円形を示し、長径9.52m・短径4.74m・深さ93~121cmである。壁は緩やかに掘り込まれ、溝底は起伏があるが舟底状を呈している。溝の南側・中央部・北側で須恵器の壺や壺の一括が押圧された状態で出土する。

4号墳周溝よりは古い。遺構の性格や内容などは不明である。



第5図 1・2・3号溝跡土層断面図

3 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱にして16箱である。そのほとんどは土器で縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器であり、その内須恵器が14箱を占める。少量ではあるが縄文時代の石匙1点と石器剝片、さらに寛永・天保通宝がそれぞれ1点出土する。

土師器・須恵器は、4号墳周溝や3号溝跡の中層から溝底にかけて一括に多量に検出され、2号溝跡や3号溝周辺から僅かに破片が出土する。縄文土器では、4号墳中央部の28-30グリットのIII層中より出土し深鉢形を示す。波状の山形沈線を施す前期大木5式の土器がまとまって検出される。陶磁器片は調査区の全体、II層上面からポリ袋2袋出土し、江戸時代末葉から明治期に製作されたものである。なお、縄文時代の土器や石器および陶磁器片については紙面の関係で割愛し、古墳の時代を決定する土器を図示した。各土器の概要については表にまとめ、ここでは各種別について概述する。

(1) 土師器 (第6図1~4 図版7)

今回の調査では、量的には少なく4号墳周溝東側からのみ出土。高环・鉢・壺等の器種は検出されず、坏・盤の二種類である。

坏 (1・2) 口径14~16cm前後で、両者とも器形が丸底を示すものとみられ、内面が横方向の窓ミガキで、黒色処理が施されている。1の外面は口縁部で丁寧なヨコナナ、下半部でヘラケズリによる器面調整がなされる。2外面も1と同様な種法で器面調整されているが、胴中位に沈線状の稜線がみられる。

盤 (3・4) 高台が付く。須恵器の高台付様の器形を示し、1では高台部付近から屈曲をもって立ち上っている。内外面の調整は、土器の遺存状態が悪いが、高台部付近で窓ケズリの削痕が認められ、底部は回転ヘラケズリ状になり調整されている。内面の底周辺部にもヘラケズリ底がみられる。底部はやや丸底状を呈し、器厚がやや厚味がある。1・2とも高台部が外反する。

(2) 須恵器 (第6~10図5~39 図版7・8)

出土地区は半数以上が、4号墳周溝 (SD1)・SD2・3の覆土中層から下層にかけて出土し、遺物量の約90%は須恵器の完形品や一括・破片で占められている。今回の調査では、器種が蓋・高台坏・壺・横瓶・甕の5器種に分けられ、坏等の破片はII層中より僅かに出土しているのみで少破片のため割愛した。

蓋 (5・6) 内面のかえりを有する6と有しない5の2種類の形態に分けられる。5は、天井部がやや平坦で、側縁が緩やかに丸味をもつ。つまみ部は天井中央が突起状を呈し、縁が薄手である。外面は側縁でヘラケズリの調整がなされ、内面は肩部まで回転ヘラケズリ調整が施され、横ナナの仕上がりがみられる。須恵器坏や高台坏の蓋である。

6は、短頸壺あるいは長頸壺の蓋で、肩部のみの破片で内面のかえりを有する。器形は肩部がく字状を呈し、やや直立し口唇部が平坦で大きく外反している。外面の調整は肩部

でヘラケズリの痕跡がみられるが横ナデによる丁寧な調整である。内面も外面と同様に横ナデの調整である。

高台杯 (7~9) 3個体とも同様な形態を示し、高台杯付近で屈曲になり、やや直立するように口縁部が外反する器形で、7は高台部付近がとくに丸味をもつ。9は高台部の破片で、底径から推測すると7と同程度の法量である。器高は8に比較する7がやや高く深形を呈している。3者とも内外面とも横ナデによる丁寧な調整であり、底部の切り離しもヘラ切り、回転ヘラケズリによる調整が施されている。

壺 (10~12・14・16~20・22・23) 10は完形品で高台を有する長頸壺である。頸部上位から大きく外傾し口唇部が外反し、胸部最大径が上半部の肩部付近にあり、胴中半から底部にかけて大きく湾曲している。胴最大径17.3cmである。器面の内外面ともナデによる丁寧な調整が施されている。底部は回転のヘラ切りによる切り離しで、良く調整されている。内面頸部から外面の高台部付近まで自然釉がみられ、肩部や高台部には釉垂れがある。

11・12は、11が長頸口で12では口縁が幅広の短頸口であり、11は10に類似し、12は肩部からやや直立し口縁から口唇にかけて外反し、いずれもかえりが認められる。22・23は10や11の形態を示す口縁部破片である。内外面とも横ナデによる丁寧な調整が施される。

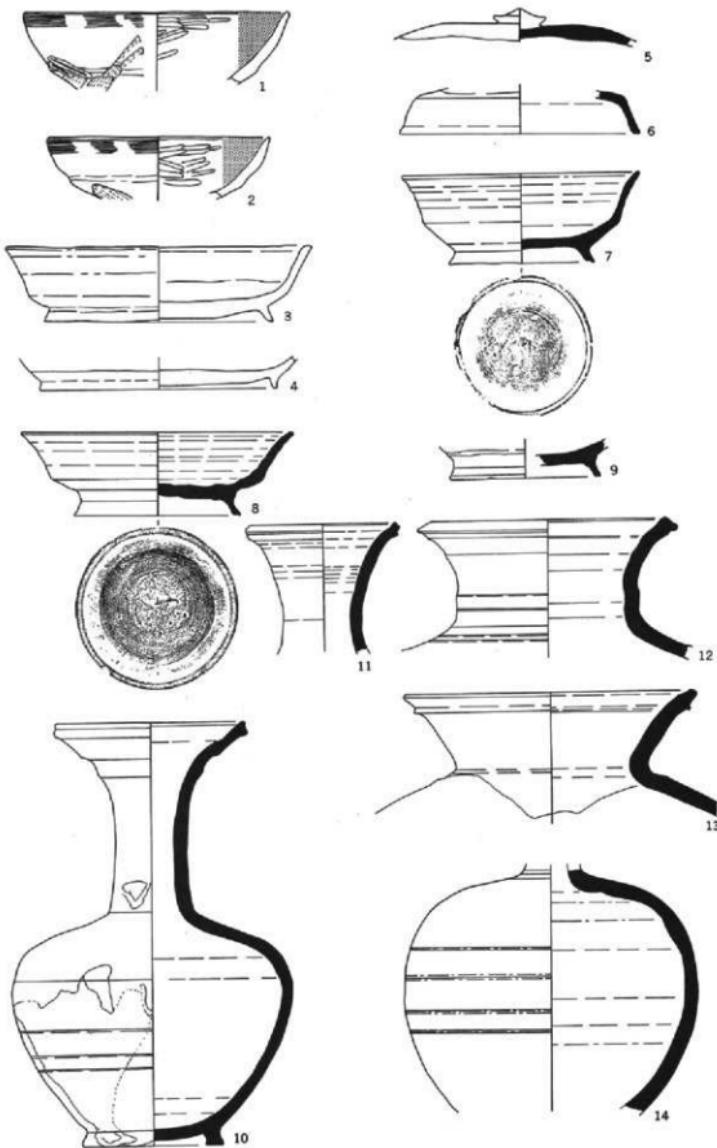
14は、長頸壺の胸部破片で、最大径が胴中央部にあり全体的に丸味をおびている。胴最大径は18cmを測る。頸部から肩部の口径が極端に狭いのが特徴である。肩部から胴中半にかけて自然釉がみられる。内外面ともナデ調整が施される。10も同様であるが、焼成も良く堅く締り、胎土も緻密である。20は胴中半部の破片である。

16~19は壺底部の破片でいずれも高台付である。16は小形壺の器形を呈し、高台部内面は湾曲し外反する。外面は高台部で稜線がみられ、丸味をもって立ち上る。底部の調整は不明である。19はやや大形の壺になり、高台部付近から立ち上り内湾する。18は高台が丸味を持ち外反し、底部も丸底風を示している。17は高台が低いのが特徴である。焼成は18以外は良く、ナデによる調整が施されている。

横瓶 (21) 胸部破片である。外面はタタキ目の痕跡があり、その上をハケで調整している。内面はナデ調整がなされている。

甕 (13・15・24~39) 13・15・25~28は口縁部の破片、35・36は肩部の破片で、いずれもが大形の破片である。32・33・37は胴部破片、38・39は胴下半から底辺部の破片である。29~31はほぼ完形品で底部が欠損し、34は肩部から胴下半部までの大形の甕である。

頸部から口縁部にかけては、肩部付近から大きく外傾し口唇がさらに外反する13・26・27・30・31、肩部がやや直立し口唇部直下から外反する15・25・29の2つの形態が存在する。24は31と同様の口唇部形態を示す。24~28は口唇部直下から肩部にかけ、櫛目波状が横位方向に施されている。24~26は内外面とも自然釉がみられる。内面の肩部には無文アテによる叩き締めの後、ナデ調整が行なわれている。25は、ヘラケズリの調整痕が内面肩部に存在する。26は内面の肩部に平行タタキが施され、上部は丁寧に良くナデ調整がなされている。



第6図 土器実測図(1)

肩部は、胴最大径が上半部の肩口にある35、胴中半部にある36とがある。いずれも外面が平行タタキ、内面が同心円のアテによる叩き締めの後、ナデ調整が施されている。

胸部から底辺部にかけて32・33・37～39で大形の壺である。32の外面は平行タタキが施されているが、その後研磨するようにナデ調整が良く施されている。33・37～39は内外面に平行タタキと同心円のアテにより叩き締められている。

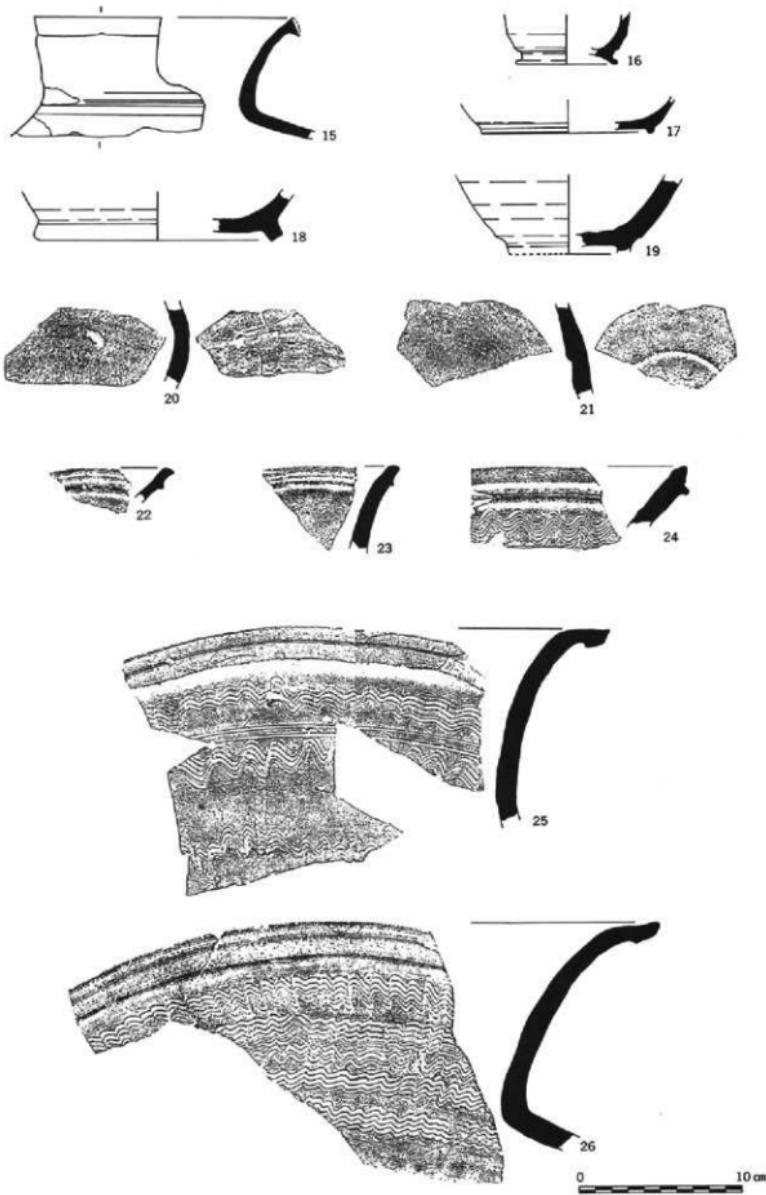
29はSD1（4号墳東側周溝）の下層部より広範囲に散在した状態で出土する。器形は口縁が肩部から頸部にかけてやや直立しながら内湾し、口唇部が平縁となり、胴上半部に最大の膨らみを有し、胴中半部が大きく湾曲しながら、底辺部が狭くなる中形の壺を呈する。計測値は、口径22.0cm・頸径19.6cm・最大径39.9cm・現存高42.8cmを測る。器厚は頸部から肩部にかけて底辺部付近が最っとも厚く1.8～2.2cmである。外面の胴中半部に篦状工具の先端を用いて削痕が認められるが、文字等の判別は出来ない。調整は、外面で口縁部から胴部まで平行タタキを施し、その後口縁部を中心にナデ調整が行なわれ、内面も同心円のアテにより叩き締めの後丁寧にナデ調整を施す。焼成も良い。

30はSD3の北側下層部で押圧された状態で出土する。器形は口縁が頸部から大きく外傾し口唇部がさらに外反、肩部が大きく張り最大径を有し、胴上半部から底部にかけやや直線的に立ち上り、底部は欠損する中形の壺である。計測値は、口径21.8cm・頸径18.6cm・最大径42.8cm・現存高42.8cmである。外面の調整は、口縁部でナデ調整を、胴部は平行タタキを縦位・斜位に施す。内面は同心円のアテの叩きの後にナデによる丁寧な調整が行われている。焼成は良く、胴中間に部分的に自然釉がかかっている。

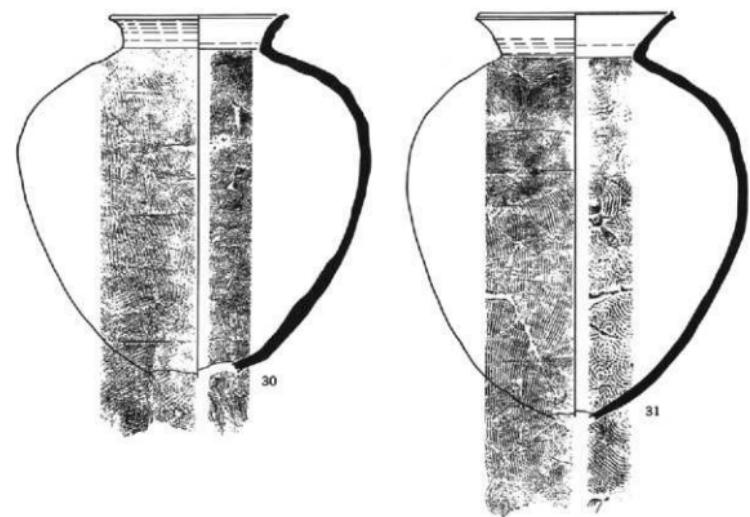
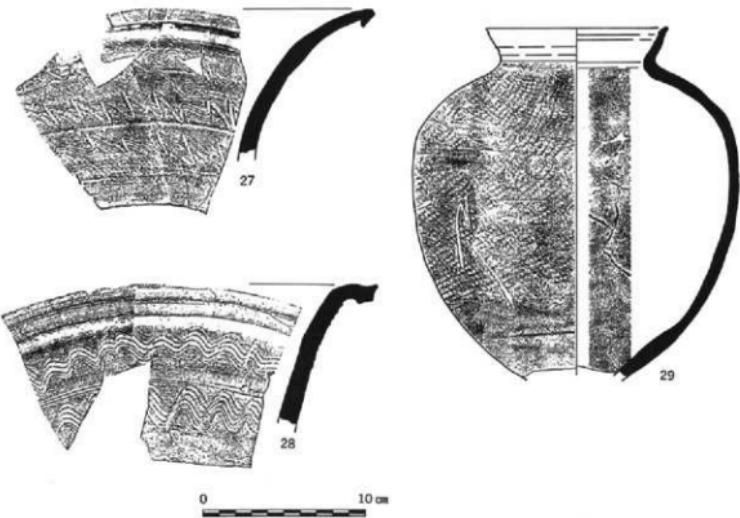
31は、SD3の南側の下層から30と同様に押圧された状態で出土する。器形は、口縁が頸部から大きく外反し、肩部がなめらかで胴中間に最大径を持ち内湾し、底辺部が狭くやや直立するように緩やかに上の中形の壺である。口径24.2cm・頸径18.2cm・最大径41.3cm・現存高49.4cmである。なお、底部は欠損している。調整は口縁部の内外面とも丁寧なナデ調整がなされ、胴部の外面は平行タタキが肩部で横位方向に中半以下は縦位に施される。胴部内面は、同心円状のアテにより叩き締められ、頸部から肩部にかけナデ調整がみられる。焼成も良く緻密で堅く締っている。

34はSD1（4号墳東側周溝）のRP1の中央部下層より29と同様に散在した状態で出土する。器形は、口縁部と底辺部・底部が欠損し、頸部から肩部にかけて丸味を有し、胴中半部が垂直的で丸味がなく、胴下半から内湾するように丸味を持つ大形の壺を呈している。最大径は胴上半部である。計測値は、頸径42.2cm・最大径75.4cm・現存高54cmを計る。調整は外面で平行タタキを縦位に、内面で同心円状のアテを叩き締め頸部付近はナデ調整が施されている。

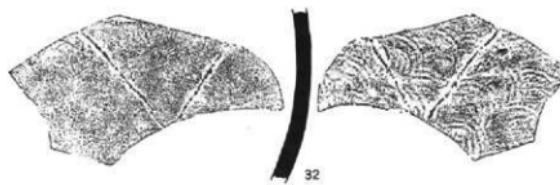
以上のように、今回出土した土器は集落跡で普遍的に出土する煮沸形態の土器を欠いているが概むね供膳形態の土器が出揃っていると言えるが、各器種別の製作技法や器形の相違による細分が可能であるが数量的な観点から割愛し、器種別の分類に留まった。



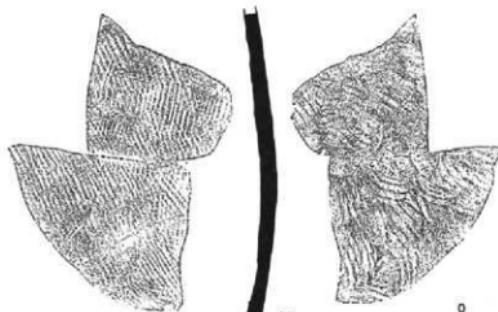
第7図 土器実測図(2)



第8図 土器実測図 (3)

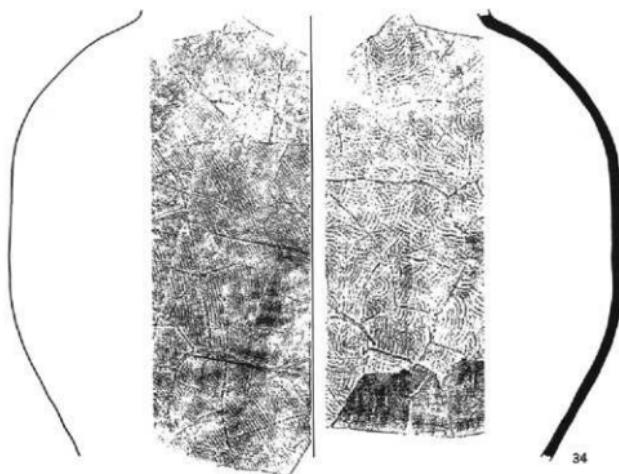


32



33

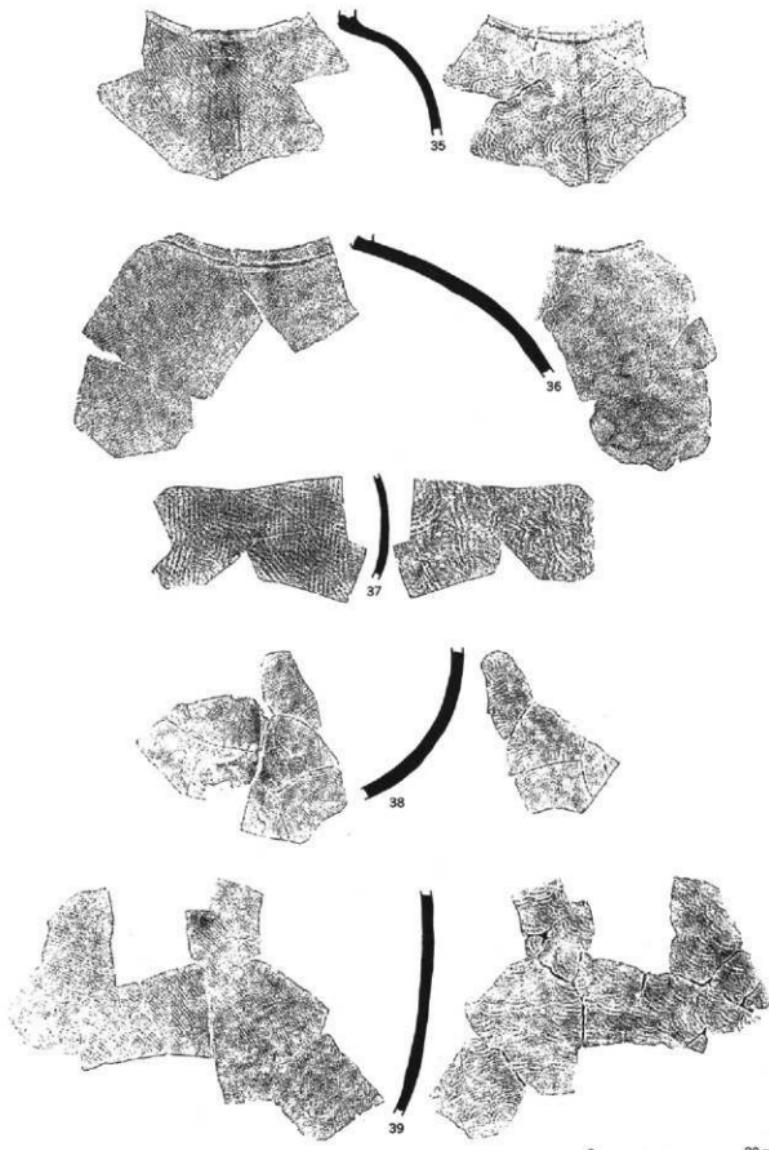
0 10 cm



34

0 20 cm

第9図 土器実測図(4)



第10図 土器実測図 (5)

表-2 土器観察表

地図番号	遺物番号	器種	出土地地区	計測値(m/m)		色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法		備考
				口径	底径					外側	内面	
第1回	1	土器	环	SD 1 (F) RP 1	164	(43)	褐色	細砂混	良		横ナダミガサ ヘラケズリ黒色処理	
	2		环	SD 1 (F) RP 1	145	(35)	褐色	細砂混	良		横ナダミガサ ヘラケズリ黒色処理	
	3		盤	SD 1 (F) RP 1	188	140	46	黄 横	粗砂混	不良	ヘラ・調整	ヘラケズリミガサ
	4		盤	SD 1 (F) RP 1		(145)	(28)	明褐色	粗砂混	不良	ヘラ・調整	ヘラケズリミガサ
第6回	5	蓋	SD 1 (F) RP 1	(136)		(21)	褐 反	細砂混	良		横ナダミ横ナダ	
	6		蓋	SD 2 (F) 33-34	148	(22)	褐 反	細砂混	良		横ナダミ横ナダ	
	7	高台坏	SD 1 (F) RP 1	146	89	54	暗褐色反	鐵 密	密	ヘラ・調整	ナデ横ナダ	
	8	高台坏	SD 1 (F) RP 1	168	104	50	明褐色反	鐵 密	密	ヘラ・調整	ナデ横ナダ	
	9	高台坏	31-29(II)	92	(17)	褐 反	鐵 密	良	ヘラ・調整	ナデ	横ナダ	
	10	蓋	SD 1 (F) 南西側	104	87	259	褐 厚	鐵 密	密	ヘラ・調整	ナデ	自然釉有
	11	蓋	SD 1 (F) RP 1	90		(20)	褐 厚	細砂混	良		ナデナダ	口頭部
	12	蓋	SD 1 (F) RP 1	75	166	(86)	青 厚	細砂混	良		ナデナダ	口頭部
	13	甕	SD 1 (F) RP 1	180	(76)	暗黃灰	粗砂混	良		ナデアテ	自然釉有	
	14	蓋	SD 1 (F) RP 1	(145)	180	(244)	暗黃灰	鐵 密	密		ナデ横ナダ	自然釉有
	15	蓋	SD 1 (F) RP 1			(78)	灰 細密	鐵		ナデアナ	ナデ	自然釉有
	16	蓋	32-28(II)		64	(30)	褐 厚	細砂混	良	ヘラ・調整	ナデナダ	小形壺
	17	蓋	26-25(II)		164	(18)	灰 黑	細砂混	良	ヘラ・調整	ナデナダ	
	18	蓋	SD 1 (F) RP 1		153	(30)	灰 黃	粗砂混	不良	ヘラ・調整	ナデナダ	
	19	蓋	SD 1 (F) RP 1		(76)	(50)	灰	粗砂混	良	不明	ナデナダ	自然釉有
第7回	20	蓋	SD 1 (F) RP 1				黃 厚	細砂混	良		ナデナダ	胴中央部
	21	横瓶	24-27(II)				暗黃灰	細砂混	鐵	タタキ目ナハ		胴中央部
	22	壺	41-45(II)				灰	細砂混	良	ナデナダ		
	23	壺	30-27(II)				オリーブ 黒	細砂混	良	ナデナダ		
	24	壺	SD 1 (F) 南西側				灰	細砂混	良	細目波状	ヘラ・ナデ	自然釉有
	25	壺	SD 1 (F) RP 1	(242)		(117)	灰	細砂混	良	細目波状	ヘラ・ナデ	自然釉有
	26	甕	SD 1 (F) RP 1	(231)		(138)	灰	細砂混	良	細目波状	ヘラ・ナデ	自然釉有
	27	甕	SD 1 (F) RP 2	(254)		(90)	灰 オリーブ	粗砂混	良	細目波状	ヘラ・ナデ	
	28	甕	SD 1 (F) RP 1	(226)		(87)	灰 白	粗砂混	良	細目波状	ヘラ・ナデ	
	29	甕	SD 1 (F) RP 1	229	(181)	(428)	灰	粗砂混	良	タタキ目	ヘラ・ハケ	
第30回	30	甕	SD 3 (F) RP 5	218	(96)	(651)	灰	細砂混	良	タタキ目	ヘラ・ハケ	
	31	甕	SD 3 (F) RP 3	242	(38)	(694)	黄 灰	鐵 密	密	タタキ目	ハゲ	
	32	甕	SD 1 (F) RP 1				黄 灰	細砂混	良	タタキ目	ア テ	
	33	甕	SD 1 (F) RP 2				灰	粗砂混	良	タタキ目	ア テ	
第34回	34	甕	SD 1 (F) 銅鋌				灰	粗砂混	良	タタキ目	ア テ	
	35	甕	SD 1 (F) RP 1				灰	粗砂混	良	タタキ目	ア テ	肩 部
第36回	36	甕	SD 3 (F) RP 4				黄 灰	粗砂混	良	タタキ目	ア ケハ	肩 部
	37	甕	SD 1 (F) RP 1				オリーブ 黑	細砂混	鐵	タタキ目	アハ	自然釉有
	38	甕	SD 1 (F) RP 2				灰	細砂混	鐵	タタキ目	ア ハ	底 迂 部
39	甕	SD 1 (F) RP 1					灰	粗砂混	鐵	タタキ目	ア ハ	

IV 調査のまとめ

今回の調査は、平成3年度に実施された「風土記の丘」歴史公園建設事業の歴史資料館用地造成工事に先立って行った緊急発掘調査である。現地調査は、平成3年4月15日から5月23日までの延25日間に亘り、安久津4号墳を主体に約1,744m²の調査面積を数え、昭和60年度の北目・鳥居町支群の調査に引き続いて第2次調査となる。

安久津支群は、これまで5基の古墳が確認されているが、古墳の形状や現況を留めているのは1・2号墳のみで、3・4・5号墳は水田等の開田の際に上部構造が破壊を受け現状をまったく残していないため、分布試掘調査によって位置や範囲を特定したものである。

古墳のうち、3号墳は基底部の土層観察から検出したもので、その範囲は東西7.5m・南北8.5mとなり、恐らくは1号墳と同程度の規模とみられ、周溝等の付属施設は確認できなかった。4号墳は3号墳と同様に上部構造は認められないが、周溝が検出されて形状は多角形を示し、南東側が開口している。規模は東西24.5m・南北23.25mとなる。周溝の南西側と東側より須恵器の壺や甕が一括して出土することは、古墳築造時と時間的な差があり、被葬者を葬る際の墓前祭あるいは祭祀等が取り行われたと推定され、壺や甕などの若干の型式差を考えると追葬時にも行われたとみられる。4号土坑は土層の堆積状から観察して4号墳と同時期で付属の施設と考えられるが性格は不明である。3号清跡は4号墳よりも古い段階で存在しているが性格および内容が不明確である。

出土した遺物は、須恵器の壺や甕が主体を占め、4号墳の東側周溝から大半が出土している。出土土器の年代は、土師器坏で山の神1号墳b2類に共通し国分寺下層式に比定され、盤も同様の時期に相当すると考えられる。須恵器は、全般に米沢市笹原遺跡や川西町檀山古窯跡出土の蓋類・高台坏類・壺類・甕類の時間的な経過が類似しており、笹原遺跡の第5層と第6層出土の須恵器に共通しており、年代的には8世紀中葉から末葉にかけてであり、主体は末葉の時期が多いようである。

安久津3・4号墳の造営された時期も出土した遺物からみてこの年代に近接すると考えられ、北目1・鳥居町9号墳が古く8世紀前半頃で、次に山の神1号墳が8世紀中頃、最後に安久津3・4号墳が8世紀後半頃の年代順が与えられると推定できる。

参考文献

- 西村貴次 1937 「霞陽地方の古代文化」 地土研究叢書第八輯
山形県教育委員会 1953 「山形県の古墳」 山形県文化財調査報告書第4號
工藤定雄外 1968 「中郡村史」 中郡村史編さん委員会
高畠町 1971 「高畠町史」 別巻 考古資料編
山形県教育委員会 1975 「清水前古墳群発掘調査概報」 山形県埋蔵文化財調査報告書第3集
米沢市教育委員会 1981 「笹原」 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集
山形県 1982 「山形県史」 第1巻 原始・古代・中世編 山形県
山形県教育委員会 1985 「安久津古墳群」 山形県埋蔵文化財調査報告書第95集
山形県教育委員会 1987 「山の神1号墳」 「分布調査報告書04」収録 山形県埋蔵文化財調査報告書第110集

図 版

図版 1



調査区近景 (E↑)



4号墳調査風景 (SW↑)

図版2

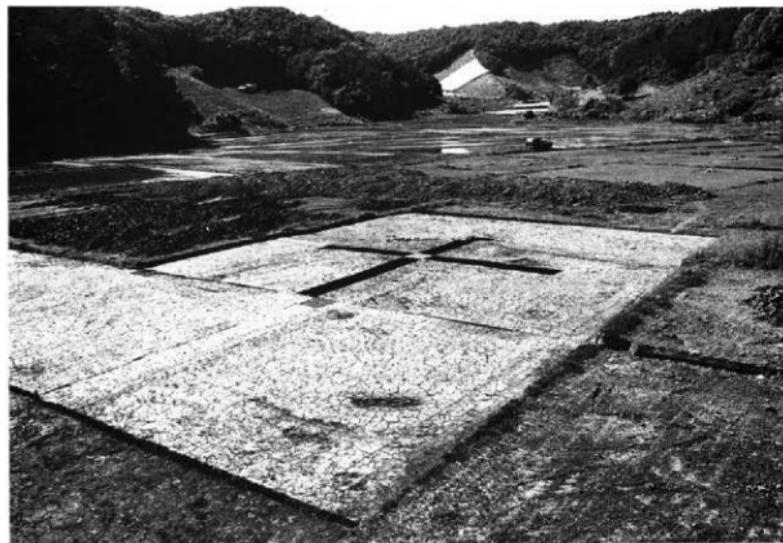


1号墳近景 (S↑)

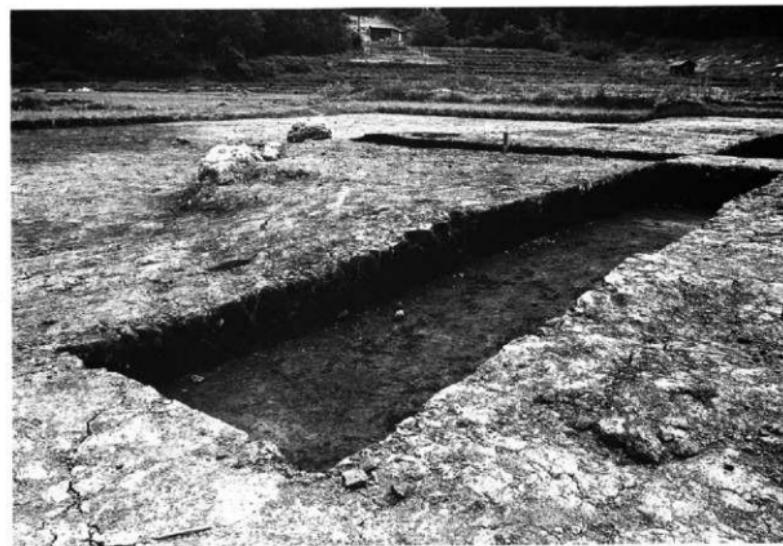


2号墳近景 (S↑)

図版 3



3号墳近景 (E↑)



3号墳土層断面 (S↑)

図版 4



4号墳全景 (S↑)



4号墳 (1TR) 土層断面 (NW↑)

図版 5



4号墳東側周溝全景 (SW↑)



4号墳周溝土層断面 (SW↑)

図版6



4号墳東側周溝確認 (N↑)



周溝内出土土器 (N↑)



周溝南側土器出土 (E↑)



周溝内出土 (S↑)



3号溝跡全景 (NE↑)



3号溝跡土器出土 (SE↑)



1・3号溝跡土層断面 (S↑)



4号土坑全景 (SW↑)

図版7



図版 8



10-35



10-37



8-29



10-38



9-34



8-31



8-30

土器（2）

山形県埋蔵文化調査報告書第180集

県指定史跡

あくつ

安久津古墳群
安久津第3・4号墳
発掘調査報告書

平成3年3月25日発行

発行 山形県教育委員会
印刷 株式会社 大風印刷
